

# 漱石と月

北村 薫

益田ミリア



1  
田川美希は、元宝出版の社員である。雑誌『小説文宝』編集部にいる。

大学時代には、バスケットボールに青春を捧げていた。授業にも出、テレビでおなじみの有名教授の顔を見たりはした。しかし、体育館の思い出の方が色濃い。

運動部でしっかり活動して来た体育会系編集者だ。汗とボールの日々を送った者たちの仲間意識には、特別なものがある。出身部活との繋がりは、かなり強い。

卒業してからも、よく大学に顔を出した。あれやこれやのさし入れをするだけではない。OGは、社会人の先輩として就職相談にも乗る。

美希はいえば、小論文の書き方のアドバイスもしてやった。そこはそれ、毎日、文章と向き合っている身だ。お手のものである。面接の指導などもしてやった。

卒業生の就く職種はさまざまだ。選手時代、コーチの指導に感銘を受け、パーソナル・トレーナーの道に進んだ先輩もいる。その道で知られる人になっている。アスリートから女優、一般人まで何十人も体調管理を引き受け、大きな信頼を得ている。体育会系の進路として納得できる。

一方、美希のように文芸編集者を志す者もいなくはない。かなりの後輩になるが、春秋書店に入った子がいる。

子供の頃から本が好きだったという。コートに立ちながら

も、  
——ボールを手から放したら、次は編集者になりたい。というのが、来世を夢見る信者のごとき願いだっただい。

そこに美希がいた——というわけだ。先輩の中の先輩、キング・オブ・キングズのように、輝いて見えたらしい。指導を実に熱心に聞いてくれた。

その子が、この六月、めでたくジュニアフライドになった。

「何で、六月が縁起がいいんですかね」

「よくぞ聞いてくれました、田川ちゃん」

と、『小説文宝』編集長、百合原ゆかりが胸を張った。美希は、眉を寄せ、

「また、いいかげんなこというんでしょ」

「上司をなめちゃあいけないよ。六月はね、結婚と女性と家庭の守護神ジュノーの月なんです」

「……ジュノーですか」

「だから、ジュニアだよ」

「あ。そうか」

「その神様の月だから、保証付き。六月に結婚すると幸せになれる。ジュノー様が守ってくださいるんだ」

「はああ」

「まあ、三月に結婚しても幸せになった人はいるよ。——わたしだけどね」

「あい」

戦後、大流行した曲なのだ。昔の人の口から、すぐ出て来るのも無理はない。

この辺りが、噂の序章になるわけだ。伝説が世に広がり始めたのは、七〇年代の末からだと分かる。

その後、この件について語る人が、漱石が馬鹿野郎と怒鳴った、と書いていたりする。

——漱石らしくないなあ。

と、首をかきあげたくなる。らしくないのも道理、漱石ではない。《ばかやろう》は、つかこうへいの口調なのだ。資料を並べてもらおうと、謎はあっさり解けてしまう。

《I love you》の日本語訳はしばらくの間、歌謡曲の文句《月がとつても青いから》として伝わって行く。明治の漱石と時代が違う——と気になったのか、あるいは、その流行歌自体の記憶が遠いものになったためか、次第に《月》は《青い》から《綺麗》に移行して行く。

吉原幸子が雑誌『言語生活』に書いた「うまい恋文」とい恋文」の中で、「どこかで見かけたエピソード」として語っているのが、《夏目漱石》《I love you》

——それなら、どう訳したらいいんだ。

と、考えてもおかしくはない。《私はあなたを愛します》が、日本にない言い方なら、どうしたらいいか。

そこで漱石マニアたちが、半ばふざけながら、流行歌の文句を引き合いに出し、——ま、《月がとつても青いから》しばらく一緒に歩こう——とでもいうしかないか。

——いい合う。あはは。

翌年、一九七七年。伝言ゲームでどこから流れて来たこれを、豊田有恒が書いた。

面白いから、さらに広まる。つかこうへいがしゃべり、ますます広がる。

やがて、吉原幸子の頃から《月がきれいですね》というパターンになって行く。

推理とも推論ともいえない。妄想の類いだ。しかし、資料の並びを見ると、美希の頭に、そういう流れが見えて来た。

編集部に戻り、スマホで、『月が綺麗ですね・死んでもいいわ』検証』の続きを見てみる。

手塚がいつていた、刑事ドラマも出て

《月がきれいですね》の三要素が揃った最初だという。これが、一九八七年。学生時代の村山先生が、聞いたことがないのも当然だった。

漱石が没してから六十年以上経ってから、この形での拡散が始まり出したのだ。漱石先生もびつくりだ。

## 10

しかし、漱石自身に関わる、確かな資料もひとつ紹介されていた。

岩波書店から出た、村岡勇編の『漱石資料—文学論ノート』である。漱石がノートに残した断片について調べた労作らしい。

ロンドンに留学していた漱石が、『Victoria』という小説中の『I love you』について、『日本ニナキFormulaナリ』と記しているという。漱石先生が、英語の表現『I love you』について書いているとしたら、見逃せない情報だ。

ありがたい。美希が調べても、こんなところには、とてもたどりつけない。待てばしのない方だから、すぐに会社の資料室に走る。

来た。『相棒』だった。映画版『家に帰ると妻が必ず死んだふり』をしています。』も。

さらに、流れては消えて行くラジオの音までチェックされていた。二〇一八年のNHKラジオ第二『カルチャーラジオ文学の世界』だ。ピーター・J・マクミランさんが、英国留学中の漱石が、『I love you』を日本語にするのに思い悩み、『月が綺麗ですね』とした——と語っていたそうだ。

ひよつとして日本人には分からない、あちらの資料があったのだろうか。考え出すと、気になって仕方がない。

マクミランさんといえば、美希も『英語で読む百人一首』を読んでいる。先生が製作した英語版『百人一首』は、知ると同時にほしくてたまらなくなり、神保町の奥野かるた店に出掛けて、買って来た。撫でさすりたくなるような、美しい札たちだった。

そういうわけで、一方的にだが、親しみを感じている。

何かとお忙しいマクミランさんに、こんな伝説についての問い合わせをするな

天下の文宝出版である。文芸の基礎資料なら揃っている。中でも、岩波の『漱石全集』は基本中の基本だ。棚にあったのは、全二十八巻・別巻一のバージョン。『ノート』は第二十一巻に収められている。繰り返し出版され、練り上げられて来た『漱石全集』だ。索引はしっかりしている。『Victoria』で引くと、五カ所ばかり出ている。その二番目であっさり、小説の会話文に続く漱石の論評が見つかった。

此 I love you ハ日本ニナキFormulaナリ

巻末の、漱石全集編集部による「後記」を見ると、この巻に収められたのは従来の『漱石全集』に収録されなかった「紙片」資料。それをまず翻刻したのが、『村岡勇編『漱石資料—文学論ノート』で、刊行は一九七六年。

熱心な漱石読者なら、当然、新資料に飛びついたらう。

留学生漱石の、『I love you』という言い方は日本にない——というくだりを読んで、

ど、考えただけでおそれ多い。だが、在籍するのは文芸に強い会社だ。百合原編集長に相談すると、——文宝出版編集部員田川美希としてなら、聞いて聞けないことはないだろう。という意見だった。勇気を出して、うかがってみることにした。

## 11

村山先生に、早速、ここまでの流れを話した。画面を通してのやり取りである。

「なるほど。そりゃ、すんなり説明はつくな」

「《月がとつても青いから》って、よく知られた文句だったんですか」

「そりゃそうだ。子供の頃、秋になると大掃除をした」

「暮れじゃないんですか」

「うちは秋だった。お天気のいい日曜日、庭にござを敷いて、うちの中の箆なんかをそこに出して並べた。そうしておいて、畳をはずして、ぽんぽん叩く。ほこりが出たなあ」

「はあ」

「こつちは、箆の上のぼって、文字通

りの高みの見物だった。そういう時、ラジオから歌謡曲が流れて来た。『月がとつても青いから』とか『からたち日記』とか『有楽町で逢いましょう』とか

懐かしのメロディーだ。先生は、うつとりした表情で、『からたち、からたち……』。付き合っではいられない。

「要するに、あんな時こんな時、耳に入つて来るポピュラーな文句だった」

「そうだな。だから、『月が』となつて『青い』になるのは、ある時期の人間には、『雪』といつて『白い』になるくらい自然だな」

「時代ですねえ」

「うん。しかし、『I Love You』からどうして『月』になるのかな。……その辺りがふに落ちない」

「そりゃあ、『月が』とつても青いから』が愛の歌だからでしょう」

「しかし、愛の歌なら山ほどある。よりによつて、どうしてそこに行くのかなあ」

村山先生は、首をひねり、  
「いずれにしても、昔はなかつた話——  
というのには確かなようだなあ。こつちも、気になったんでいくつか当たつてみ

たよ。近代文学の書誌についてなら、川島幸希先生という方がいらつしやる。研究者であり、何より情熱的な資料の収集家だ。驚異的な数の蔵書をお持ちなんだ。その先生が、読みやすくして面白い文学者のエピソード集を出している」

「140字の文豪たち」という本を画面に出してくれる。秀明大学出版会刊行だ。

「——ここに、『月が綺麗ですね』について、《しばしば》問い合わせを受けている——と書いてある。それだけ広まっているんだな。漱石の授業を受けた学生たちの文章や証言は、昔から沢山ある。しかし、この件に関するものは見当たらない。都市伝説だろう——とした上で先生は、『どこから出てきた話なのか。これについても調査されているようですが、漱石とは直接関係がないので、私はあまり関心がありません』といっている」

やはり、根のある話ではないようだ。マクミランさんからは、お忙しい中、まことに丁寧なご返事をいただいた。何年も前のラジオでのひとことについて、真剣に対応していただき、恐縮するしかない美希だった。留学中のこととして話

が『草枕』。それを、ばらばらとめくり、  
「——ここだ、ここだ。西洋の詩の根本はどうしても《人事》になる。《どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか》が問題になる。しかし、『うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山』」

夕食前、畳座のテーブルに向かい合うと、美希はおみやげ代わりに、『月が綺麗ですね』の話題を出した。  
「ああ。その件か」  
「聞いたことある？」  
「高校の先生だからな、夏目漱石なら、必ず取り上げる。その時、同僚とあれこれ話す」  
「そこで——出て来た？」  
「ああ。随分、前になるなあ……。若い先生がいい出したんだ。おかしいなあと思つて首をかきあげたら、『有名な話ですよ』という。《何に出てました》と聞き返すと、はかばかしい答えがない」  
「ほう」  
「『草枕』は読んでますか」と聞くと、『恥ずかしながら……』

頭をかいている、後輩の先生が見えるようだ。  
「嫌みな先輩だね」  
「いや。いじめるつもりはないんだが、どうしてもそうなる。有名なだけがあるだろう。——初めの方だ」

父は立ち上がる。しばらくすると、漱石本や雑誌を、何冊か持つて来る。中の一冊

していたとしたら間違いであったと、述べられていた。

さらに、友人であるダミアン・フラナガンさんが、流行歌『月がとつても青いから』の影響を受けた都市伝説である可能性にもきちんと触れながら、このエピソードに共感を覚える人はいませんか——と語っていると教えてくださった。

12

七月になった。

披露宴の着物が、もう何週間か美希のところに置いてあった。管理上、いいとはいえない。それは手慣れた母に頼むのが、美希にとつても着物にとつても幸せだ。

仕事が一段落した土曜、雨空が曇りになったのを幸いに、着物と帯を風呂敷に包み、中野の実家に向かった。

父が、本年の家庭菜園の収穫見本を、ざるの上に並べて見せてくれた。

「立派だねえ」

瑞々しいキュウリと艶やかなナス、それにインゲンもあった。

「だろう、だろう」と喜ぶ父。

リスで、雪見に人を誘つたら笑われたというんだな。——芭蕉に『いざさらば雪見にころぶ所まで』という句がある。風流の代表が雪月花だ。漱石先生はイギリス人に、その《雪》を、あつさり否定されてしまった」

「うーん」

「勿論、日本人全てが風流というわけではない。芭蕉先生は、川柳で『雪見には馬鹿と気の付くところまで』と皮肉がれている」

「痛いねえ」

「痛いし、うまいな。現実的なものの方からのからかいだ。そちらから見ると、当然、ある。しかし一方に、伝統的感性というものがある。——『草枕』の痛いというなら、雪を見に行くと、金もかかるわけではない。先に彼女が待っているわけでもない。それでも行くんだな、江戸の風流人は」

「うん」

「漱石先生、さらに『月』はあわれ深いものだといつたら、びつくりされた。庭石を置かないのかといつたら、石なんかあつたら捨てるという。風情のある松をい